

歩兵第十六聯隊の終戦及び軍旗奉焼

新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

昭和二十年八月十五日終戦までの五ヶ月間は、軍事行動として見るべきものはなかった。然し、太平洋戦争の情勢変化に伴って、我が軍の戦略的地位は遂次悪化し、フィリピン中部の失陥から終戦に至る間は、仏印内に於ける自戦、自活、防衛態勢の強化の時期で、二十年三月以前は、日、仏印共同し、明号作戦以後は、我が軍に於いて自主防衛準備に邁進した。

歩兵第十六聯隊は、昭和二十年七月三日、ビルマより仏印に転進し、南部旧仏印ロンタンにおいて終戦の詔勅が下った。

聯隊は、二十一師団（金沢）二十二師団（仙台）三十七師団（熊本）の各兵団から補充員を受領して、部隊の再建を実施していた。

終戦に関する陛下の御放送を痛哭断腸の思いで聴いた。聯隊将兵は只々茫然、悲涙、墳涙にむせぶのみであった。このような状況下にあっても聯隊は、堺聯隊長（ビルマ雲南で負傷したが再度聯隊長になる）の適切な指揮によって何等事故もなく、一糸乱れぬ厳正な軍紀を保持し、八月二十三日、本部・聯隊砲、通信各中隊はホンカンへ、第一大隊はツドウモ、第二大隊はバメツオ、第三大隊はロクニンへ夫々移駐し治安警備についた。

【軍旗奉焼】

聯隊長は、ホンカンに移駐するや英・印両軍を迎える前に、軍旗をどうするか心痛されていたが「軍旗は奉焼せよ」との命により軍旗を奉焼することになった。

軍旗奉焼の命令は終戦後全軍に対して同八月三十一日（降伏調印予定日）までに完了するよう陸軍大臣から通達（陸機密第三六二及び陸機密三六五号）された。

聯隊長は、九月十日夜奉焼と決め、各分駐大隊から代表を招致して、十日ホンカン聯隊本部前広場で聯隊将士整列の下に、悲痛極まりない軍旗離別式を挙行了た。

聯隊長の「終戦大詔の大心に沿い誠に忍び難いことであるが、ここに赫々たる武勲に輝く軍旗を奉焼することになった。この上は更に軍紀を厳正にし、聯隊の伝統をけがすことなく終戦の業務に精励せよ」との涙ながらの訓示があると、整列している将士の目に悲涙が光っていた。

この式が終わってから、軍旗の最後の写真を撮り、一旦聯隊本部に安置し、夕刻まで奉焼準備を行った。

聯隊長は、伝統ある歩兵第十六聯隊旗を跡形もなく奉焼してしまうことは忍びない。その一片でも新発田に持ち帰りたいとの心情から紫の房の一片を切取り、各将校に奉持せしめた。

軍旗奉焼にあたっては、原住民に察知されないように場所をホンカン北方約一キロのゴム園のはずれ、密林に接した所に在った小屋の庭を選び、ここにガソリンドラム缶一本と多数の蒔きを準備し、午後十時から奉焼することとなった。

午後九時三十分、軍旗は田中聯隊旗手が奉持し、聯隊長先導して聯隊将兵見送る中を自動車で奉焼場に着き、四方に衛兵を立てて厳重な警戒の中で軍旗奉焼が行われた。

一間四方、三、四尺の高さに積んだ蒔きの上に、房を旗竿に巻いた軍旗を横たえ、その上からガソリンをかけて旗手が点火をした。

パット物凄い勢いで蒔きは燃え始めたが、数千の霊と明治以来、この軍旗の下に奮戦した将士の英気が凝り固まって軍旗にしみついているのではないかと思われる程、あの火力の強い中でも房も旗竿もなかなか燃えつかない。一言も発するものもなく、パチパチと蒔きのはねる音だけがゴム園と密林の闇に消えていく。

戦場で屍をさらすは武人の誇りではあるが、国の敗戦によって軍旗を奉焼するということは、何といっても堪えられない悲しい、痛ましいものである。

総じて聯隊歴史で読んだ日清、日露、シベリア、満州、ノモンハン、北支の激戦の中に、或いは今次、太平洋戦争に於けるジャワ、ガダルカナル、ビルマの作戦に常に聯隊戦力の核心として、その先頭にあつて聯隊の士気を振起した軍旗は今炎の中で、祖国日本が敗戦の中にたどる苦悶を暗示するかのような形で燃え尽きようとしていた。

旗竿は約三時間ばかりで完全に奉焼出来たが、竿灯の菊の御紋章は色が変わっただけで溶けず、午前二時頃本部に持ち帰った。

翌日御紋章は、「鑿」で粉々に砕き、その片々を棄てるのは恐れ多いということになって各将校に房の一片と共に奉持せしめた。

ここに於いて、軍旗の英姿は永遠に消え、再び見る事が出来なくなった。

【「歩兵第十六聯隊旗の最後」(当時第一大隊長、亀岡少佐 誌)より】

その後十月二十三日、英印軍はロッタム准将を長として進駐、十二月五日、我が軍の帯刀者全員に対する軍刀の献上式（日本軍の武勇を讃えて、武士道の礼に対し騎士道の礼をもって武装解除とは別に配慮されたものであった）が行われた。

献上の際、十年後の変換を約束した受領書の通り、第二大隊長高橋少佐の軍刀の返還については、英国騎士道の美談として、当時大きく地元広島の新聞に報道され、軍刀は長く広島城に展示保管された。

明けて昭和二十一年一月二十三日、アプトリーに移駐、ここで自治自活の態勢に入った。しかし比較的早く故国送還が明らかにされた。

五月二日より米軍輸送船に乗船し、十二日大竹港に上陸、十三日復員完結。同日附をもって、すべての官職は「免職」となり陸軍戦時名簿に記載され、第一復員省に提出をしたのであった。

ここで明治十七年八月十五日、宮中において軍旗の親授式が行われてより、初代聯隊長山本清堅に始まり、最後の堺吉嗣聯隊長によって歩兵第十六聯隊の幕は閉じられた。

（「新発田聯隊史」より）